

令和 3 年 10 月 31 日

## 第 63 回 全国社会教育研究大会 石川大会報告

社会教育委員 笹川 博人

1. 日 時 令和 3 年 10 月 28 日 (木) 13:00~16:40
2. 会 場 石川県小松市 こまつ芸術劇場うらら (オンラインで参加)
3. 内 容

## 一. 一般社団法人全国社会教育委員連合会長 鈴木 真理 挨拶

今年も昨年同様、コロナ禍のなかでオンライン併用の大会となったこと、地域で展開される社会教育も大きな影響を蒙ってきており、中止や延期を余儀なくされる中でも、人々の意識改革・行動改革をめざしているものだから、今後も積極的活動を展開することが求められているはずだ。

## 二. 第 63 回全国社会教育研究大会石川大会実行委員会委員長 小泉 勝 挨拶

社会教育は少子高齢化や人口が減少するなかで、「人づくり」「地域づくり」「つながりづくり」が期待されている。小松市は歌舞伎十八番の一つである「勸進帳」の舞台となった地であることから、「智」「仁」「勇」の徳が古くから受け継がれ大切にされてきた。社会教育委員には新しい地域づくりに挑戦していくことが求められている。研究主題として、「地域の未来を創る社会教育のさらなる挑戦」としたところである。

## 三. 記念講演：演題「御御御付けと腸を考える」(株)ヤマト醤油味噌代表取締役 山本 晴一氏

日本有数の味噌しょうゆの文化地であるこの地で、百年間毎日コツコツとあたり前にやってきただけの会社です。発酵食美人を訴えたい。日本の食は安土桃山時代に現在の基盤が出来(一汁一菜一糍の食事スタイル)、それ以前の時代人は 40 才まで生きるのはまれであった。江戸期では、大名で 50 才前、家臣・公家で 50 才半ば、僧侶で 60 才後半というのが平均寿命のようだ。こうじ菌の存在は 1300 年前から知られ、今では菌の菌はこうじ菌とのことだ。発酵食品を毎日食べれば、腸の働きが活性化され、ひいては健康をもたらし、肌つやは磨かれ、発酵食美人がこの地に増えるゆえんである。そういう食生活を次の世代に伝えてゆくことを私の使命と考えるところだ。

## 四. シンポジウム：テーマ「人びとが豊かに暮らすまちづくりを目指す 新たな学び」

コーディネーターから、社会教育に期待される役割は何か、創造すべき新たな学びとは何かの問いかけがあり、3 人のシンポジストによるそれぞれの立場からの現在の状況・課題の発表を受けて、会場や全国からの質問に答えるかたちで新たな学びを考察する機会とした。

印象に残る発表としては、野々市市観光物産協会事務局長の「管理する施設から運用する施設へ。仕組みは行政が作って、利用者は若い世代が集まることをすること。規制をなるだけ作らない。誰でも来たくなるやり方をする。金もうけでもやれないことはなく、要はどれだけ人に来てもらえるかが優先されるべき。」

又、石川県公民館連合会長からは「社会教育という言葉はマイナスイメージがあり、それをブ

ラスのイメージに変えて行くのが社会教育委員の仕事だ。公民館がなくなることはないが、これからのことを考えれば、まちづくり団体やNPOなどとも交流して行くことが必要だ。」

又、国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット事務局長からは「古い器に新しいワインを入れても美味しくない。公民館なども古いことばかり継続しては若者は入ってこない。若者のこない公民館は若者の問題ではなく公民館側の問題。学ぶことは教えることから。今日私が教えていることが、実は一番私自身が学んでいることだ。地域には色んな知恵があり、そういう人から学ぶことが大切。」などなど新鮮な発言が相次いだ。

総体的に感じたことは、社会教育委員とは何をどのようにしたいかをはっきり自覚し、公民館・図書館・学校などと同じおもしろさを共有しながらやっていく事だと確信できたことだ。特に自分の好きなこと、興味あることでなければ他人や行政を納得させることは難しく、又長続きしないだろうということ。要は、何をしてもいいが常に挑戦し続ける姿勢で事に当たるのが大事だと考えさせられた。